

はじめに

1990年代半ば以降、情報通信技術（ICT：Information and Communication Technology）、特にインターネット、の性能の向上と普及は先進国を中心に急激である。他方で開発途上国の大きな部分は、この利用から取り残されている。このICTをジェンダー問題との関連で見ると、上にふれたいわゆるデジタル・デバイドが国際的に更には国内的に存在する一方で、この新技術は、適切に利用されるなら、労働の場、生活の場で女性の地位向上に貢献する可能性があり、地位向上に向けた経験その他の情報交換を通じて女性の運動にも活用されることが語られてきた。

ICTを社会の全場面で利用する情報社会に関しては、世界情報社会サミット（WSIS: World Summit on the Information Societies）の第一ラウンドが2003年12月にジュネーブで開催され、2005年のチューニスでの第二ラウンドに向けて、論議が進行中である。このWSISは、国連が関与したICT関係のはじめての大規模な国際会議であり、そこでの政府間取り決め（宣言と行動計画）は、この分野での状況把握や政策の基礎として重要である。このWSISの文書作成に向けては、ジェンダー・コーカスが活動し、ジェンダー視角の持ち込みに努力した。これによってこれら文書には女性に関する一定の言及がある。

メディアに関しては、この分野の政策・意思決定への女性の参加・関与が小さく、拡大するメディアを通じての社会に配布される情報内容が、女性についての消極的で、品位を落とす、屈辱的な描写、伝統的役割分業観を再生産あるいは強化する描写となっている等の点が継続して問題視されてきた。この情報内容を転換させることは、第4回国連世界女性（北京）会議以降、北京+5会議を経て現在の課題である。

こういったメディア・ICTの問題の現状と背景・原因、影響の分析や政策立案に、ジェンダー統計がどう貢献すべきかは、統計研究において重要な課題である。WSISを一つの契機としてICTとジェンダー問題への注目が高まる中、改めて、ここでの統計の貢献が問われる。しかし、この分野をジェンダー統計視角からとりあげて行く動きは、国際的にも国内的にも非常に弱い。この分野は男性による支配は強く、ジェンダー視角が特に手薄な分野だからであろう。

そこで、本統計参考資料では、ICT・メディアとジェンダー問題、ジェンダー統計に関して、重要関係文書の翻訳と経過の説明を中心とする論文を示すことにした。本号の当初企画は、ICTとジェンダーに焦点をあてていたのでICTに重点をおいている。

G.M.Marcelleの論文の翻訳を許諾されたUNDP、統計指標に関する論文の翻訳を許諾されたNancy J.Hafkinに感謝する。

本冊子の所収文書の翻訳と論文は伊藤陽一が担当した。

本資料でとりあげた文書はこの問題への統計の側からの取り組みの第一歩に位置づけられる。今後継続して取り組み、深めていくべきものがある。その意味で資料のタイトルに(1)を入れた。